

2008年度 国立音楽大学音楽学専修

(音楽学研究コース・音楽情報社会コース) 専門ゼミ

研究発表会



2008 図書館展示 11 月

期間：2008 年 11 月 10 日～12 月 5 日

展示場所：図書館ブラウジングルーム

2008 年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会

祭りと音楽

～ 祭りの中に生きる心の音～

「なぜ祭りは人を高揚させるのか」それには音楽が大きく作用しているのではないが、という考えが私たちのなかで漠然と浮かび上がりました。そこで、祭りと音楽について、音楽大学の学生として研究を試みることにしました。しかしながら、祭りを形作る諸要素 神・人間・信仰・建築・服飾・音楽など は「ハレ」の場をつくる上で、統一的で不可分なものです。そのため本研究では、音楽だけ切り取って考えることをせず、総合的に「祭り」を分析することで、私たちにとって音楽とは何か、という究極的な問いを「まつり」を切り口とした視点から考えていきます。また、様々なタイプの祭りが交錯する今日、「まつり」をより広い視野から捉えることで、音楽文化の多様性を再認識し、各々が祭りと音楽、そしてまつりと音楽と自身の関係を意識するきっかけを、この研究発表によって提示できればと思います。

発表日時

.....

平成 20 年 12 月 4 日 (木) 18 時より
6 号館 110 スタジオにて

まつりとは

「まつり」という言葉は様々あります。漢字で表すだけでも、「祭り」「奉り」「祀り」の三種類と多様なのですが、元々の意味はすべて同じです。とは言え、現在ではそれぞれ言葉のニュアンスが異なり、大衆的な集会や縁日を表す場合は「祭り」、寺社の祭礼や儀式などでは「祀り・奉り」を用いることが多いのではないのでしょうか。

そもそも「まつり」とは、神を奉る行動がその語源になっていますが、現在多く見られる祭り（夏祭りなど）からはそのようなイメージは喚起されにくいと思われれます。ここでは分かりやすく、知らない人はいないであろう「盆踊り」を例に考えてみましょう。

盆踊りと言えば夏の風物詩、夏祭りには欠かせないイベントです。この辺りであれば、東京音頭や太鼓の響く音が聞こえてくると夏を感じずにはいられないでしょう。今でこそ踊ることそのものを目的として楽しんでいます、本来盆踊りは「葬祭」の「祭」にあたる（祖先の霊を迎えるため、まつるための）行事でした。仏教と共に日本に伝わり（6世紀中頃）、室町時代の末に、現在のような大衆娯楽として親しまれるようになったと伝えられます。

このように大抵の祭は何かしらの起源を持っているのですが、時代が降ると共にその宗教的意味合いが薄れていきます。この背景には神道仏教に対する人々の考え方が変わったことがあるでしょう。特に、政教分離によって祭りそのものの意義が疑問視される（ 1 ）と、まつりは本来の姿を失い、今日のような形態にならざるを得なかったのではないのでしょうか。

祭政一致の例ではありませんが、例えばクリスマスは、これはキリスト教の祭礼行事ですから、本来であればキリスト教徒以外の人間が参加するのは明らかに異質であります。しかし日本では大半の人がクリスマスを祝い、一週間と経たないうちに神社へ初詣に出かけます。これはほとんどの日本人が無信教である（ 2 ）ことに起因しており、日本人のまつりに対する価値観を示す一例と言えます。

1 政治の「政（まつりごと）」とは、やはりまつりが語源になっていると言われます。古代は祭政一致であった、つまり政治は神託（神を奉ることで、神の意志を聞く）によって行われていたためです。政教分離によって政治と宗教が切り離して扱われるようになるということは、すなわち、原義とは別に政治とまつりを無関係のものとしたと考えることができます。

2 神道が多神教であるため多くの宗教を受け入れているという意見もありますが、それでは現代の日本人が神道的な思想でキリスト教を意識しているかということ、それは考えづらいように思えます。

まつりと音楽

祭囃子に代表されるように、まつりには音楽が付き物です。先述の神託の際にも、音楽を奏でることで神を呼び寄せていたということが『古事記』からうかがえます。同じく『古事記』の〈天の石屋戸〉伝説などでも、音楽によって神々を笑わせる描写が出てきます。古来より音楽は人と神を繋ぐ媒体として用いられていたことが分ります。これは日本以外の国でも同様のことであり、三大宗教圏ではもちろんのこと、それ以外の諸民族においても多くが信仰のための音楽を持っています。

キリスト教の賛美歌などは私たちの耳にも馴染みがあるでしょう。神を崇拝するための音楽が現代に至る西洋音楽の根幹になっているのであれば、ここに、西洋人の音楽に対する感性の源泉が見つかるはずで、同様に日本人の音楽の感性も、日本の音楽の起源、つまり、まつりを探ることで明らかになっていくのではないかと考えられます。そしてそこから、音楽の新しい解釈が生まれてくる可能性もあるでしょう。

普段何の気なしに触れているまつりですが、こういった視点から見ることで、私たちと大変関わりの深いものであることが分ります。この研究に限らず、何らかのまつりに携わる際には少し注意してみると新たな発見があるかもしれません。

日本音楽とまつり

雅楽：神社で行われる奉納祭などで奏されます。規模の大きなものになると舞がつきま。その他、神道の結婚式や葬式など、身近な風習の中にも広く見られます。

声明：仏教系の唱歌を指します。法華経、般若心経などが有名です。日本で行われる葬儀の大半で用いられています。

能楽：現在では儀式的要素は強くありませんが、〈翁〉〈三番叟〉を含む式三番は、神事など特殊な行事でのみ上演されます。

歌舞伎：直接信仰と関わるものではありませんが、能楽の式三番を似せた演目や、祭囃子のように民間の芸能から採り入れた音楽があります。

展示資料

パネル

【鷲宮催馬楽神楽「太刀折紙之舞」】

鷲宮神社（埼玉県）で奉納される神楽。国の重要無形文化財に指定されている。神楽とは、日本に古代から伝わる、神を祀るために奏される舞楽。全国に4000を越える神楽が存在するが、このような古来からの格式高い形式を現代まで残している神楽は少ない。

太刀折紙之舞：面をつけた手力男命が白い折紙と太刀を持って舞う。家内安全、魔除けの光明を見出す舞といわれている。

（撮影：折原麻美）

【法界寺裸踊り】

午後七時ごろ、薬師堂で法要が営まれるとき、三組に分れた禪ひとつの地元の男たちが冷水で身を清めて本堂縁にかけのぼり、両手を頭上にあげて「チョウライ、チョウライ」と唱えながらもみあう。終りに牛王札が撒かれる。

（出典：田中義広編『日本の祭り事典』 p.41）

【縁日での一幕】

平安時代から行われていたという縁日。元々は神仏と人々が縁を結ぶ結縁の日を選んで祭りや供養が行われていた日。だが今日では人々の息抜きの場となっている。様々な露天が軒を連ね、お囃子の音の中を人々が行き交う雰囲気血が騒ぐという方もいるのでは。

（撮影：山下彩）

【祇園祭 山鉾巡行】

日本三大祭の一つ。平安朝初期の祇園御霊会に始まるという。一般には十七日の山鉾巡行が有名であるが、実際には一日の吉符入りから始まり、約一ヶ月にわたり、さまざまな行事が行われる。山鉾巡行では、長刀鉾・函谷鉾・放下鉾・岩戸山・船鉾・北観音山など三十一基の山鉾が、四条烏丸から四条河原町を北上して御池通りを烏丸御池まで巡行する。京都を代表する祭りである。

（出典：田中義広編『日本の祭り事典』 p.147）

【吉祥寺秋祭り】

昭和48年、武蔵野八幡例大祭に吉祥寺の商店街が神輿を出したことから、この「秋祭り」は始まりました。数々の自慢の神輿を見せ合い、もっとも町興しとして力を入れているお祭りです。

（撮影：小島めぐみ）

【阿波おどり -徳島市役所前にて-】

徳島から興った阿波おどりは、日本に限らず海外でも上演の機会を設けている。今日行われているものは戦後の地域復興を目的としていたのだが、今や日本全国に波及し、この関東近県にも多く見られる。

（出典：読売新聞徳島支局編『阿波おどり物語』 p.147）

図書

読売新聞徳島支局編『阿波おどり物語』

読売新聞徳島支局, 1974 請求記号 C33-272

倉林正次著『埼玉県民俗芸能誌』

錦正社, 1970 請求記号 C21-172

芳賀ライブラリー編著 ; 芳賀日出男監修『祝祭 : 世界の祭り・民族・文化』

東京 : クレオ, 2007 請求記号 R386/S

坪井洋文, 三隅治雄編『日本祭祀研究集成 ; 第5巻. 祭りの諸形態. 3(中国・四国・九州・沖縄篇)』

名著出版, 1977 請求記号 請求記号 J10-625

湯沢司一, 左近士照子共編『日本の奇祭』

ルック社, 1968 請求記号 J79-667

西角井正大編著『日本の祭り ; 2. 関東』

講談社, 1982 請求記号 J53-556

守屋毅構成 ; 中牧弘允文『日本の祭 : 祭のサウンドスケープ』

丸善, 1991 請求記号 J74-156

田中義広編『日本の祭り事典』

京都 : 淡交社, 1991 請求記号 R386/N

『ふるさとまつり歳時記』

宮崎県企画調整部地域振興課, 1989 請求記号 R386/F

松平斉光著『祭』

平凡社, 1998 請求記号 J86-931

鶴見俊輔, 小林和夫編『祭りとイベントのつくり方』

晶文社, 1988 請求記号 C58-139, 他

宇野正人監修『祭り日本人 : 信仰と習俗のルーツを探る』

青春出版社, 2002 請求記号 J96-206

山内忠著『祭りの音楽 : 音の原風景を訪ねて』

相模原 : 現代図書, 2001 請求記号 C65-332

松平誠著『祭りのゆくえ : 都市祝祭新論』

中央公論新社, 2008 請求記号 J113-600

守屋毅編『祭りは神々のパフォーマンス : 芸能をめぐる日本と東アジア』

力富書房, 1987 請求記号 C44-089

鶴見済, 清野栄一著 ; 木村重樹編集・構成『レイヴカ』

筑摩書房, 2000 請求記号 C64-930

2008 図書館展示11月

祭りと音楽

～ 祭りの中に生きる心の音～



企画 国立音楽大学音楽研究専修(音楽学研究コース、音楽情報社会コース)専門ゼミⅠ,Ⅱ

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2008.11.25 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会:三宅巖・二塚恵里